
丸い月

yasu1980

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

丸い月

【コード】

N0772H

【作者名】

yasu1980

【あらすじ】

この小説は、違和感。漠然とした状況。置かれたとき。している。表現。世界。

体育館の舞台そでのようだ。照明もついていない。うっすらとした夜である。恐らく。

私は精気のない状態に思える。肉体が自分のものと感じられない。

「離人感」

なんとなく。ステージに上がりたと思った。視線を向けると、女の子が居る。

私に気づいたようだ。げんそうに様子を見ている。私はどうしたものかと、階段を昇る動作を止めた。

「転校生でしょ？」彼女は少し大きな声をこちらに送る。私は状況がよくわからないので、なんとも反応できない。

「文化祭の前の日になんて、すこし変な感じね」なるほど、文化祭の前日に私は転校してきたらしい。

「でも、なんか、ちょっとかわいそう。文化祭といえば、いろいろな準備が楽しいから」もつともな意見に思える。うちとけた感覚を得た。階段を上る。

「食券とか全然もってないでしょ」何か作業をしながら、彼女が言う。ステージに上がると、暗いながらも全体を見渡せた。また、この体育館の広さは、ごく一般的なものであるとわかった。演台には小さな灯りがあり、それは、彼女の作業にはじゅうぶん足りている。

「私、実行委員だから、遅くまでいろいろやってたの」小さなビニール袋をさしだした。

「だいたいの券入ってるから。それ、あげるよ」私は受け取る。いろいろな工夫された券が混ざっている。なんとなく嬉しく、私はその彼女に大変な好感をもった。

「なんで、こんな時間までいたの。委員でもないのに」私はついに発言しようと思う。

「施設の見学をしていたのです」「自分の声なのかどうか怪しい音声がのどが出る。

そもそも、いったい私は実年齢の姿かたちなのであるうか。今になつてそのような思考を持つ。

「そう。私はもう仕事済んだから帰るけど」「革のかばんを持ってまさに帰ろうとしている。

私はどうすればよいのか、全く思い浮かぶところがない。ただ、立ち尽くす。

次の瞬間、すでに彼女の姿はなかった。とてもさみしい感覚を覚える。

私は、やはり、そこを出るべきだと思い、入口へと向かう。体育館を出ると、屋根つきの通路があった。だが、視界は良くなく、この一歩先に何かがあるかが分らない。

見上げると黒い空に、丸い月が在った。振り返ると、通路がなくなっている。

しばらくして、もはや私は、闇の中の「なにか」でしかない。

ただ、丸い月だけは、はっきりと見える。

考える。その月も、私のみしか見ることのできない、私に似た「なにか」なのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0772h/>

丸い月

2010年12月10日20時22分発行